

平城宮

平城第394次調査 2005.12.17

東朝集殿の調査



調査の経緯

平城宮には2つの中枢部があります。東の中枢部には北から内裏、大極殿院、朝堂院、朝集殿院が南北にならびます。朝集殿院には2棟の朝集殿が東西対称に並ぶと推定されています。このうち東朝集殿は1968年に発掘調査され、礎石建ちで瓦葺きの南北棟建物であることが確認されています。

その後、大極殿院と朝堂院には、礎石建ち建物の下層に掘立柱建物があることが明らかになりました。これらの建物を取り囲む区画施設も掘立柱塀から回廊あるいは築地塀に造り替えられています。下層の掘立柱建物はいずれも奈良時代前半期です。

2002年には朝集殿院南門を発掘し、南門は造営当初から礎石建ちで、下層には掘立柱の門はないことがわかりました。さらに2003年の調査で、朝集殿院南面の区画は掘立柱塀から築地塀に造り替えられていることがわかりました。

この調査の目的は、東朝集殿下層建物の有無を確認することにあります。調査は10月3日から開始し、現在も継続中

です。10月に、地表面から地中レーダーによる探査をおこない、朝集殿基壇の範囲と状況を把握することができました。

調査成果

東朝集殿の基壇の規模は南北長約38m、東西幅約18m、階段は南北幅が約4m、東西幅約1mです。基壇の東西には合計6基の階段がありました。基壇の上面は後世に削平されており、礎石の位置が大変分かりにくい状態です。基壇の周囲には幅20cmほどの浅い溝がめぐり、基壇の範囲を示すための区画溝であったと考えています。

基壇は平らに整地した地面の上に黄褐色の山土を積み上げて築成しています。基壇の周囲には多量の凝灰岩が散乱していたことから、基壇は凝灰岩を加工した切石で飾られていたことがわかります。

また、基壇の断割調査によって、基壇を築成する前に掘られた柱穴も確認しました。そのほか、基壇の東側と北側にはそれぞれ南北、東西にならぶ掘立柱列が検出されました。



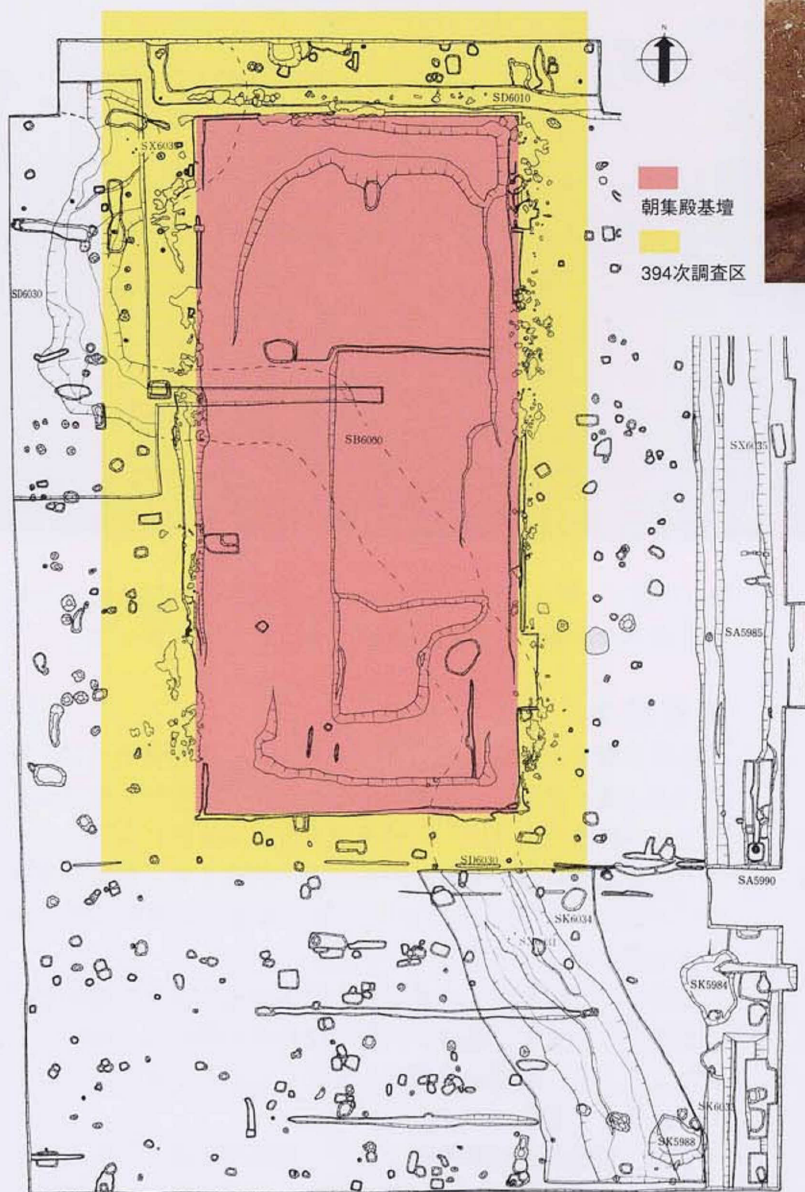
基壇東側の掘立柱列（北東から）



基壇東縁の区画溝（北東から）



基壇下の柱穴（南西から）



平城第48次調査平面図（1968年）

東朝集殿の建物

礎石建ちの東朝集殿は、唐招提寺講堂として平城宮から移築されたという記録が残っています。唐招提寺の講堂を解体修理した際の調査によると、もとの朝集殿の規模は南北9間、東西4間、桁行柱間13尺（約3.8m）、梁行柱間11.45尺（約3.4m）の建物であったことがわかりました。1968年の発掘調査の結果、唐招提寺講堂の前身建物が確かに平城宮に存在し、出土した瓦から奈良時代後半の建物であることが明らかになっています。

今後はこれまでの朝集殿院の調査成果を踏まえて、奈良時代前半期の朝集殿院全体のあり方を検討していく予定です。

東朝集殿の調査 平城第394次調査 2005年12月17日
 (独)文化財研究所奈良文化財研究所 平城宮跡発掘調査部
 〒630-8577 奈良市二条町二丁目9-1 <http://www.nabunken.jp/>